

# 『支那事変歌集 塹壕の砂文字』と柳原白蓮

—その編纂意図—

中西 洋子

はじめに

一九三八年（昭13）九月刊行の『塹壕の砂文字』は、タイトルの肩に「支那事変歌集」と掲げる通り、日中戦争に因んだ合同歌集である。柳原白蓮の選であり、編集も兼ねていた。日中戦争はこの前年、三十七年七月七日の盧溝橋事件を契機として始まるが、戦いは長期化し、ついに四一年十二月第二次太平洋戦争へと発展してゆく。思えば三一年の満州事変以来、一五年戦争

と呼ばれる長い戦いの年月とともに日本はあった。

本稿では、この歌集がどのような内容の歌集であるかを繙きつつ、白蓮がどのような思いを込めて編集しようとしたのか、その編纂の意図はどこにあったかを考えてみようとするものである。合わせて、本歌集の刊行がこの後の白蓮の人生にどのように関わっていくことになるのか、についても言及しておきたい。結論から先に申せば、白蓮は学徒兵として出陣した愛息・香

織を戦死させている。四五年八月十一日、敗戦日四日前であった。『地平線』所収の「悲母」六十首には深い歎きの心情がさまざまに歌われており、今もなお側々と読む者の胸にひびく。しかし、やがて悲嘆の淵から立ち上がり、息子を戦死させた母親たちによる「悲母の会」から「国際悲母の会」の結成と運動を経て、「世界連邦」運動の東京婦人部長（一九五三年）として平和運動の講演旅行に晩年を捧げることになる。つまり、想像だにできなかった辛い体験と、それをのり超えて平和運動の実践へと導いてゆくための、大きな推進力となったのが『塹壕の砂文字』編纂における体験ではなかったか、という試みである。

## 一

本歌集に入る前に同時期の「支那事变歌集」について見ておきたい。主なものとして、(1)『支那事变歌集 戦地篇』（編纂代表者・村松英一、大日本歌人協会編、改造社、一九三八）、(2)斎藤茂吉・佐佐木信綱選『支那事变歌集』（現地篇・銃後篇、読売新聞社編、三省堂、一九三八）、(3)斎藤茂吉・土屋文明編『支那事变歌集

アララギ年鑑歌集別篇』（岩波書店、一九四〇、アララギ叢書第77篇）(4)松村英一選『支那事变歌集 銃後篇』（大日本歌人協会編、大日本歌人協会、一九四一）、などが刊行されている。この内(1)は既に新聞雑誌などに発表した作品と限り、作者の大半が「アララギ」をはじめ「心の花」「多磨」「水鏡」「潮音」「香蘭」などの会員によって占められている。つまり(3)(4)ともに合わせて、ある程度作歌に習熟した作者であると言える。(2)は讀賣新聞社の募集に戦地から応募した作品が、二人の選者によって隔月に選歌されたのを一冊にまとめたものである。新聞歌壇への応募作という点では、後述するように『塹壕の砂文字』と近いが、作品の整い方では(2)の方が幾分勝っているかもしれない。そして、これらの選者が二人以上数人に及ぶのに対して、本歌集では白蓮単独の、女性による選と編纂である点が特徴的である。外部からの依頼ではなく、自らの意志によると思われる。

ところで、本歌集刊行の前年（一九三七）、白蓮の夫で社会主義運動家・宮崎龍介は秋山定輔（龍介の父・宮崎滔天とともに孫文の革命運動を支援した）を介し、

近衛文磨首相より蒋介石（当時抗日軍総司令）を日本に伴う密使の命を受けた。日中戦争阻止のための和平工作である。しかし、中国へ渡る直前に憲兵隊に拘束され、計画は失敗に終わっている。白蓮たち家族も家宅捜査を受けたり、一時蓼科の山荘に避難するなどしており、緊迫した日々にあつての本歌集の編纂であつた。<sup>注4</sup>滔天、龍介の身近にあり、その運動に協力しつつあることと同時期の本歌集編纂活動とは、考えようによつては矛盾する。それは本歌集の編纂目的をどのように理解するかにも関ってくることである。

『塹壕の砂文字』（A6判208ページ）の収録歌数は約千六百首。構成は、「塹壕篇」と「銃後篇」の二部からなる。しかし、戦場詠である「塹壕篇」は全体の二割強にとどまり、その大部分は「銃後篇」で占められている。『戦争詩歌事典<sup>注5</sup>』によれば、それは日中全面戦争当初であること、結社誌によらず新聞（朝日・東京日日・読売・都・福岡日日・九州日報）や、編者の関わる二、三の投稿歌を主体に編纂していることなどによる。そのため質はやや低いものの、投稿歌壇を中心として編んだ戦争歌集は少なく、この時期におけ

る投稿歌の一般的傾向は把握できる、とある。

では、本歌集の編纂意図はどのようなところにあつたのだろうか。「あとがき」に白蓮は次のように述べる。

此度思ひ立つたこの歌集も、前線にあられる方々と、銃後の留守を預る私共と、双方を結びつける魂と魂との親交を願つて、せめてお互ひの励ましあひになり、傷つき病める方々への慰めともなればとの願ひに他ならぬものであります。

また、続けてこのようにも記す。

初めは歌壇に名ある先生方にもお願いして、銃後の巻頭を飾らせて頂かうかとも思つたのですけれど、それよりもたとへ歌人として名は無くとも、まだ歌の習練は足りなく、たとへ未熟であらうとも、本当の私共の手だけで、力及ぶだけの事を致しませう、と云ひ合せたのでした。

前線で戦う兵士たちと銃後を守る者との双方を結ぶ

魂と魂との親交、あるいは、傷つき病める人々への慰めなどを願って、編んだという。そして、無名で歌は未熟であっても、「本当の私共の手だけ」で力を尽くそうとしたと。つまり、歌壇の著名歌人や社会的権威のある人々の力に頼ることなく、一般民衆の声としての歌集を目指そうとしたのであった。いわば一歌人による手作りの歌集といった趣きである。では、その方針は貫かれたのであるうか。目次は先ず板垣陸相夫人・板垣喜久子による次のような「序歌」に始まる。

へんぼんと御旗ひらめく征伐の地身にちかぢかと  
地図の上にも

濡れとほる軍衣の汗の干る間なく焦土を征くにゆ  
きとどまらず

濁江に幾日の身垢をとしつゝ、恋ひて思へや故郷の  
小川を

すめらぎのみいくさ征くにあはれあはれソ聯フラ  
ンスイギリスの武器

大君の御楯とたゞに征き進む魂をし思へばきよく  
さやけし

作者の夫・板垣陸相とは、板垣征四郎陸軍大臣。中国（支那）派遣軍総参謀長を務めており、敗戦後、A級戦犯として処刑された。右は十首からの抄出である。三首目のような、兵士の望郷の心を思いやった歌も交じるが、多くは「御旗ひらめく征伐の地」、「焦土を征くにゆきとどまらず」、「大君の御楯とたゞに征き進む」などなど、その立場からすれば当然のことながら、いずれも大君の御楯として雄々しく戦うべき兵士への、戦意の高揚をはかる言葉に散りばめられているといつてよい。さらに「銃後篇」には、

大君の辺に死ぬ覚悟昔より受け伝へたるすめらつ  
はもの 高島平三郎  
飛行機の上より落す爆弾に敵は逃げ散る蜘蛛の子  
のごと

軍 暴虐の敵をこそ打て秋毫も犯すことなきあはれ皇  
物云ひを畏む国ぞ言挙げて立つ時来れば声はいか  
づち 尾山篤二郎

雷のはやぶるなして国こぞり拵ぐる雄叫び天もと  
どろに

大君のまけのまにまに海越えて進む御軍ぞ撃ちて  
しやまむ

日のもとの益良男の子はた、かひに赴くときしす  
でに神なり

二千年ひとときにして世を更ふる崇き厳しきいく  
さ讀へむ

蠟燭のはだか火さむく土蔵より持ち征かしむる刀  
を選びつ

真綿もて胴着縫ふ間におとうとよ月は落ちたりあ  
かとき寒く

右のように高名な教育者や名の知られた歌人の名が  
みえる。もつとも、あとがきには歌を寄稿してもらっ  
たことへの礼を高島平三郎と尾山篤二郎の二人に述べ  
ているのみで、太田水穂と生方たつゑの名は記されて  
いない。この二人は自主的に寄稿したということか。  
高島への依頼は、白蓮と関わり深い日蓮宗を通してで  
あろうと思われる。高島は日蓮宗大学（立正大学の前

身）の教授であった。

高島の三首は言うまでもないが、尾山の三首も負け  
ず劣らずである。「雄叫び」「大君のまけのまにまに」「撃  
ちてしやまむ」など戦いに関する伝統的常套句の使用、  
臣民としての大義名分、さらには太田作にみられる  
「た、かひに赴くときし」すでに神なり」「いくさ讀  
へむ」なども直截的な戦争賛美の歌に他ならない。対  
して生方作では、戦いや出征そのものに対して何かを  
表明するのではなく、持たせる刀を選んだり夜なべを  
して胴着を縫うといった、具体的な行動やものを通し  
て出征する弟を思いやる心情が歌われており、温もり  
を感じさせる作品である。

さらに、「あとがき」に先だって掲載された白蓮自  
身の作品を見てみよう。

太閤がこゝろざしたて、幾百年進軍喇叭唐の野に  
鳴る

いまこゝに生れ代りていにしへの人のあとゆくま  
すらをのとも

いかさまにふるひたつべき国民のこゝろみの秋今

ぞあへりけり

髪すこし小篭に入れて残し征きぬと母者は泣かず  
語りたまへる

先生の分もと思ひ傷兵に仕へてあるといふかこの  
娘は

遠く征きし人の消息いつしかに今年も秋とはやな  
りにけり

征野にもこよひの月は十五夜と照るらむものを雲  
のいそげる

旗ふるよあれは誰が夫たれが子ぞ命をわすれ出征  
つますらを

海とほく萬歳いふや沖のかた波路の末に何かきこ  
ゆる

やがてきく東洋平和の鐘の音に君がいさをもなり  
ひゞけとぞ

十首総てを掲げた。この内、四、五、六、七、八首  
目などには戦場やそこで戦う兵士、看護婦（師）ある  
いは銃後の家族に寄り添って歌われてをり、温もりの  
ある心情が伝わる。しかし同時に、一、二、三、九首

目では「進軍喇叭」「いかさまにふるひたつべき（国  
民の）」「海とほく萬歳いふや」などのように、武勲を  
立て戦勝を願う歌も認められる。いわば、一連は人間  
のもつ偽りのない心情と、銃後にある者の国民的義務  
感に支えられた内容とが混在したかたちである。当時、  
出版物に対する言論統制が厳しかったことを思えば、  
戦争批判はむろん、生きて還れなどの本音は禁句で  
あったから、このような国策的色彩を帯びた作品が入  
るのも致し方なかったであろう。それが取りたてて  
問題にされることはなかったのである。こうした作品  
は第二次世界大戦時、長男香織の学徒出陣に際しての  
折にも見受けられる。

幼げに母に甘へて添寝（ルビママ）する吾子のしぐさ  
や征く日は近し

わが膝を枕にさせて征く吾子の頭しみく、撫で  
さすりけり

あわたゞしく語る間もなく今日となり別れとなり  
てしづ心なき

陰膳の雑煮の汁も湯気たて、すこやかにある吾子

はしのばむ

親にすぎし身み文器たけざりよう量(ルビママ)を見上げけりこれや  
御国みくにの楯たてと思ふに

国を挙げて極まるときし召されたり親をも家も忘れて征けや

借りたるを返すが如く有り難く吾子をた、せて心  
すがしき

天業に参加せよとのみことのり世にありがたや吾  
子は召されて

〔『皇道世界』一九四四年・昭一九・二月〕

右は「吾子も召されて」十四首中より抄出。前半四首は出陣しようとする息子に対する、母親の精一杯の心情がそのままにじみ出したような歌だ。しかし、後半四首では「これや御国の楯」、「親をも家も忘れて征け」、「吾子をた、せて心すがしき」、「天業に参加せよとのみことのり」などのように、これが本心かと疑わざるを得ない、まるで裏腹の戦争用常套表現が並ぶ。まさに「軍国の母」である。矛盾した印象を持たざるを得ない一連であるが、人の親としての思いと、背後

に横たわる緊迫した時代状況とのせめぎ合い、その間で揺れうごく深い悲しみを汲みとるべきなのだろう。もつとも、「あのたいへんな戦時体制の力には逆らうことができず、大せつなむすこを殺してしまつて残念でございませう」という戦後の言葉も見逃してはならない。白蓮の夫・龍介でさえ、二人と親交のあつた東大生・江浦（現加藤）美文が一九四二年海軍に入営する際、白蓮の「きみ征きて祖国安泰なり君が征く東亜の空に栄光うまるる」の歌とともに「武運長久 祝入営」と書いた日章旗を贈っているほどである。

日中戦争のいよいよ激化する一九三八年（昭一三）には、国家総動員法が施行されていた。また、これに先立つ一九二八年に治安維持法が改正され、共產主義者やそれに共感した人々の検挙が激増した。さらに満州事変の頃、一九三二年（昭七）には特別高等警察部（特高）が設置され、一九三七年には『国体の本義』という中等・高等用の副読本が全国の教育機関に配布されるなど、急速にファシズム化、右傾化をたどる時世であつた。思想の取り締まりや社会運動の弾圧が行われ、政府の権限において、人的に物的資源にさまざま

まな統制がなされたのである。皇国史観が一般国民に浸透していったのも、この十五年戦争の時期であった。<sup>注9</sup>

二

このような時世の中で、右に見られるような作品の混在は、白蓮一人の問題にとどまるのであろうか。ちなみに日中戦争当時の歌人の作品について見てみよう。

わが飛行機南京の空を襲へりとふ心地よく進むけ  
さの選歌の 佐佐木信綱

兵士たち国の使命を疑はず行くらむものか眼のあ  
つくなる 四賀 光子

一歩だに退くべからず退かば三代の業空しからま  
し

うちいだす砲弾のうなり思ふだにすでに戦線に吾  
がころ立つ 藤澤 古實

今ははや吾が夫ならじ大君のみことのまにま出で  
立つ御楯 井戸川美知子

もののふの命はわれのものならずと死ぬときも叫ぶ国の萬歳 神山 裕一  
英雄といへど悲しも死ににける兵ぞわれらと同じ民なる  
〔「短歌研究」一九三七・10月号〕

こころ凝り起臥すときに軍動きて世はただならず  
家居りがたし 斎藤 茂吉

わがどちの戦ひにゆく数ふえて心は滾つきのふも  
今日も

ひたぶるに猛風如して南下する軍のうごきを鉛筆  
にてしるす 〔「短歌研究」一九三七・11月号〕

直土に 息絶えゆく隊長を再見ざりきと言ふ 旗  
手のふみ 釋 迢空

国大いに興る時なり。停車場のとよみの中に、兵  
を見失ふ

生きて我還らざらむと うたひつゝ、兵を送りて  
家に戻りぬ

酔泣のほかにすべなしわがどちの友田恭助死にに  
けるはや 吉井 勇



和知部隊敵を屠ると云ふ言葉聴けば土佐路の空の  
すがしき

今日もまた新防人がたたかひに出で立つと云ふ朝  
雲のいろ (「短歌研究」一九三七・12月号)

このように枚挙にいとまのないと言ってよいほど、戦争を鼓舞し、戦勝を願ってやまない国粹主義的な歌が多く目につく。と同時に個人の心情の吐露された歌もまた多く見られることも否定できないのである。日露戦争に際して、出征する弟に「君死にたまふことなかれ」と歌い、天皇に反抗的な反戦詩を作った与謝野晶子でさえ、第二次世界大戦では「水軍の大尉となりて我が四郎み軍にゆくたく戦へ」と歌っているのも同様である。この時代の歌人たちがひとしく担う複雑な営為であり、白蓮もまたその一人でなかったか。

つまり、右のように先ず陸相夫人の序歌を頂き、次いで高島平三郎、尾山篤二郎など著名人の歌を掲載するという、白蓮が志した編集方針とはやや異なる、戦時体制に迎合したかに見える体裁の仕上がりとなったが、編纂の目的は先に掲げたように、あくまでも前線

で戦う兵士と銃後を守る者との〈魂と魂との親交〉にあつたと見るべきであろう。(「魂と魂との親交」とは何か。前線での作を掲げてみよう。)

### 三

た、かひに出でゆく我に幼子の手をさしのぶる常のごとくに  
横山部隊 穂積 肇

大君の御土離ると兵ら皆君が代を歌ふ涙流して  
た、かひに死にたる兵の手を合せ胸におきけり世  
のならはしのごと

北支那に若き命の次々に散りて行くなり秋の風吹く  
中山部隊 露木公一

討伐の銃を抱きて白樺の晝の林によむ手紙かな  
天皇の吾は兵なりとる銃にかしこくも菊花御紋章  
あり

三日三晩食無し我れは見出せる芋を嚙ぢりぬ十五  
ばかりも 池田部隊 阿蘇 光

泥沼の中に疲れて動かざる馬を打つ我れ何故か涙  
す

はつとして伏せたる戦友のとき遅し大地を裂きて

砲彈の落つ

緒方部隊 助田輝峰

大粒の涙を流しいななきて愛馬は遂に息絶えにけり（愛馬戦死）

弾に散る吾の命と出征時に決めしにくやし病魔につかれぬ 穂近俊彦

妻なきを身軽く思ふしたにして妻ある戦友を羨しと思ひぬ

斃れたる友の血染めの手帳をばとり出しては涙する兵 出征看護婦 古屋糸子

ご飯ですお汁ですとて食べさせる首の兵に胸塞がりぬ

弾の傷なくて母国にまみゆるが口惜しと泣きぬ兵よやすかれ 同 穂坂葉子

おのが身をはやくなほせと再生の日なきをもしらでせがむかあわれ

先に「塹壕篇」の作品は全体の約二割強と記したが、

出詠者数では「銃後篇」の五七八人に対して一七二人（延べ）、ほぼ三分の一の割合である。また、作品数は

出詠者によって異なり、兵士では二五首、出征看護師

（婦）では二七首が最も多く、大半を占めるのは一人一首である。そのような中から掲出した。類想的な作が多く目につくのはある程度致し方ないだろう。家族を含めた望郷の思い、三日三晩もの飢え、戦死する愛馬、すぐ傍で砲弾に斃れる友、戦傷兵とその看取りをする看護師（婦）の思いなど、歌の巧拙を越えて常に死と隣り合わせの、実戦における臨場感と緊迫感が生々しく迫ってくる。その根底には、「天皇の吾は兵なり」、「弾の傷なくて母国にまみゆるが口惜し」、「病魔につかれた命の悔しさなども合わせて、天皇の兵としての意識が厳然としてあつたことは言うまでもない。それは、

大君のみ楯と召され白き矢のひびきのごとくゆきて還らず 北海道 田中一清

萬歳のどよめき高しへだたりてつ、ましく立つは兵の父らし 今井美奈子

稲株に口つけて田水をすするといふ皇軍の記事に思ひ極まる 茨城県 橋本貞子

戦死するまで抱きぬしてふわれの写真吾子の遺骨

とともに還れり

大阪府 山内勝子

胸せまる思ひに我も見送りぬ馬百余頭ならびて征ける 福島県 傳法久子

幾萬のいけにへと孤児とのその上に築きあげたるかちいくさかな 櫻井英夫

死ぬるならば戦場に死ねと母親は肩の赤襷直しつと言ふ 東京市 白石 繁

皇軍に召されし家の早苗とり里の乙女の挙り手伝ふ 愛知県 村上栖山

我子にして我子にあらざ御軍に捧げし子なり心して征け 埼玉県 村上昭光

見返せど見返せど電文のたしかにも足立中尉は戦死とあるなり 東京市 足立牧子

いづくの地に傷病兵の看護すらむ日も夜もなしと短かく書ける 故人遺稿 小林年子

まごゝろをこめてさゝぐる千人針よ銃後のわれ等もたゞ一すぢに 但馬 光

「銃後篇」のこのような作品とおのずから呼応している。大君のみ楯、皇軍、戦勝、凱旋などの頻出する

語はいうに及ばず、「死ぬるならば戦場に死ね」や「我子にして我子にあらざ」なども、この時代の人々のあるべき心の持ち様として深く浸透していたことが明らかである。しかし、その言葉の裏にはかりしれない歎きのこもるのを忘れてはならないだろう。また、こうした中で五首目のような時世をストレートに批判した作が混じるのは救いである。自明のことだが、数知れぬ兵士やその為に孤児となった子どもたちの犠牲なくしては、勝ち戦などあり得なかつた。(魂と魂との親交)の一つのかたちがここに見られる。

再び「塹壕篇」における従軍兵士の作品に触れたい。

ともりはて消ぬがにゆらぐローソクの灯を見ま  
(も)りぬ便り書きあて

たんぼ、もすみれも咲くと古里へつげずけながく  
野あざみの咲く

た、かひの幾山越えて河南の此の道のべにすみれ  
咲き出づ

故国(に) 在す母そはが上をおもひつゝひるの臥  
床に今日もたらへり

前の四首は江村部隊所属の菊池源武作（P22）。罹病した病床での作である。場所は河南省のようだ。病氣療養という思ってもみなかった日々の中で、やみがたい望郷の念や遙か異国の戦場にある心細さ、寂しさのにじみ出た一連である。（一）内は筆者が補う）

故郷の夢（に）一人目覚めみしあかときをやみを  
揺（す）りて鐘の鳴りつく

只管（ひたすら）にさ、げまつりし身を病める医  
師が宇（？）にあわれけながし

尿（尿<sup>ハ</sup>ゆまりか）のみ気になりつ、も熱っぽい  
ひるのベッドに歌をおもひぬ

同胞（はらから）の事等（ことなど）訊けば伏せ  
し眼うるませてぬ幼かりしに（支那の失業者）

みづ色にはえてほのかな西空にわかに群れてか  
うもりのとぶ

呼びたまふ母が御声に驚きて覚わればやみに寢息  
のみあり

思ふこと思ひまかせずきれなくにおもひみだれて

おもひわづらふ

田も畑も家へ帰へるも飯の間も黙し在さん父と母  
のみ

こちらは北京兵站病院での、やはり同じ作者による応募作品からの抄出（P45）。採用された二十一首という歌数は、出征看護師（婦）古屋糸子（P49）の二十七首を除けば、従軍兵士の中で最も多い。この作者を白蓮がいかにも注目していたかということだろう。この一連にも先の四首と同じ内容がうかがえるが、国に捧げた命の命が病のために戦場に出られない悔しさや、中国人の失業者家族に寄せる思いやり、田畑に働く父母の具体的な動作や表情を通しての望郷の念など、歌材も多く思念も深められてより抒情的であると見えよう。

#### 四

菊池源武は長野県南佐久郡南牧村広瀬の出身。『塹壕の砂文字』に応募して採用されたのを機に、白蓮と戦地の作者との文通が行われていたことが最近明らか

になった。二〇一四年九月二十日、信濃毎日新聞の縣和彦記者から白蓮の菊池源武宛ての書簡四通についての取材を受けたことによる。画像で送られてきた四通はペンと鉛筆書きの手紙三通とはがき一通であり、文字、署名の崩し方や独特の書き癖などから判断して、すべて白蓮の筆跡と考えられた。鉛筆書き縦罫便箋の一通には次のように記されている。(旧漢字は当用漢字に／は行替え。？印は判読不可能 以下同じ)

(1) (欄外) 鉛筆でごめん下さい 私病氣して／療養のため

御手紙とお歌有難う存じました／お歌の方は早速もう出版の方へ廻しました／御病氣のよし早くよくなつてくださればい／と存じます／貴方は信州なのですか 日本へお帰りに／なつたらおめにかゝりたいもの／信州には蓼科に別荘があつて毎夏行く／のですれど今年は事変でやめました／その部隊には沢山の方々が居られる／でせうね本当に皆様の事考へると／斯うしてもゐられぬ様にすまなく／存じます／又書きます／又おたより下さ

いね／燐子／源武様／九月九日

手紙の内容は、現地の菊池源武から手紙と作品(歌の原稿)を受け取り、作品は既に出版に廻したこと、菊池の病氣を案じていること、郷里は信州のようだが、帰国したらぜひ会いたいこと、蓼科に別荘があつて毎夏に滞在するのだが今年(日中戦争)のためとり止めたこと、さらには病院に療養中の多くの兵士を思うとすまない気持になる、などが綴られている。時期は文面にある通り、日中戦争開始の年、一九三七年(昭12)九月九日とすれば出版に廻した歌は『塹壕の砂文字』の原稿であつたと考えられる。本書の印刷は三八年九月二十一日、発行日は九月二十六日である。手紙にいう原稿は、先に掲げた二つの作品群のどちらも病氣療養中の作であるため特定はできないが、送られた作品の順番に従えば後者の二十一首の方であろうか。また、次のような手紙も送っている。

(2)

御手紙嬉敷(しく) 拝見しました／御病氣も御全

快になり又一線にお働きの御様子おめでたく存じます。しかし寒さ深くなるにつれどんなに皆々様のご苦勞多き事かとひたすら感謝のほ

かなく斯うしてある事も皆様のおかげ故と勿

体なく存じて居ます。その中でお歌嬉しく拝

見しました。私の方の雑誌もすでに原稿は揃って

るの。ですけど活版や(?)のどうしても年

内はダメだと申し一月早々御送り出来るかと存

じます。どうぞお体を御大切に願ひ上ます。ひど

い戦争はもうすんだっていふ話や(?)ので。平

和の日がくると楽しんで(?)居ます。十二月

十二日。燁子。菊池源武様

この方は、病気が全快して再び戦場で働くようにな

ったのをよろこんでいること、寒さが加わって兵士

の皆さんの苦勞の多いことを思うと、内地でこうして

いるのが勿体ない、などをはじめ、歌の原稿を受け取っ

たこと、印刷屋の都合で歌誌(「ことたま」)の発行が

遅れ、来年一月早々には送れそうだとある。そして、

この戦争が間もなく終わるらしく今から平和な日が訪

れるのを楽しみにしているとも。時期は三八年だろう

か。日付けから『塹壕の砂文字』は既に本人に届いて

いるものと思われる。歌の原稿というのは「ことたま」

への原稿であろう。もう一通はがきを紹介したい。

(3) 「表」

御丈夫だとの事が何より嬉敷(うれしく)拝見

しました。御歌も有難(ありがたく)存じます。私

も。事变から御遠慮して。昨年夏は東京で暮し

ましたが病気になって。一年中大方苦しみました

「裏」

今年皆様方にすまぬと存じましたけど七月末か

ら。当地へ来させて頂きました。せめて体を丈夫

に。して少し(で?)も皆様のおるすの。御用にお

役に立てばと存じて居ます。八月一杯あて。帰

ります。涼しい風冷たい水。出征の方々を思ふと

つひ。勿体なくて泣けて来ます。ごめん下さいね

宛先は「北支派遣軍井関部隊小田部隊林宇隊」、信

州諏訪郡立科高原からである。消印には「14・8・

7」とあって昭和十四年八月七日。内容は七月十三日付の手紙と歌を受け取ったこと、丈夫であるのをよろこんでいることにはじまり、昨年は事変のため遠慮をしたが病気になって、今夏は蓼科の別荘で過ごしている、と綴られている。

さらにもう一通は次のような文面である。

(4) (欄外に) 鉛筆おゆるしを／

手紙を出したのに、雑誌を出したのに／皆戻され  
て私びっくりしてすっかり憂う／つでした。こんな  
な事なら お家の方の住所／もひかへておくべき  
だったとどんなに口惜しかったか／十月十四日附  
の御文 沢山の手紙の／中から見つけ出してすつ  
かり嬉敷なりました／よく／しらべて見ると部  
隊長が変わったのでしたね／御元気で嬉しいので  
す／ゆっくり又書きます／まあお元気で本当に嬉  
しい郵便が戻されて／私はどんなに心配したやら  
／又／燐子／菊池源武様

このように、四通いずれにも白蓮らしい人柄の表れ

た内容であることが見て取れる。たとえば、「本当に皆様の事考えると斯うしてもあられぬ様にすまなく……」、「寒さ深くなるにつれどんなに皆々様のご苦労多き事かとひたすら感謝のほかなく斯うしてゐることも皆様のおかげ故と勿体なく……」、「せめて体を丈夫にして少しで(も)皆様のおるすの御用にお役に立てばと……(中略)……出征の方々を思ふとつひ勿体なく泣けて来ます」などのように、前線の兵士に対するねぎらいと感謝、申し訳なきの思いがくり返し見られる点が共通していることからもうかがわれよう。この時世にありがちな出征兵士への決まりきった常套的文句とも、後に触れるように女性にありがちな感傷性ともとれるかもしれない。しかし、そこには遙かな大陸で戦い、傷つき病める兵士を慰め励まし、銃後にある者との双方の(魂と魂との親交)を願った『塹壕の砂文字』編纂という実践が伴っていたからではなかったか。菊池源武との文通はそうしたおのずからなる白蓮の心の動きの結果であったと考えたい。それはまた、主宰歌誌「ことたま」(第七卷第一号昭一五年十二月発行)に「つはもの集」の欄を設け、菊池源武ほか数名の兵

士の作品を掲載していることから肯げよう。

さり気なく脱ぎし軍袴は折りたゝみ枕したりし既  
に馴れ経て

瓶割つた湯呑が欲しと一人ごつ若き兵士は病みの  
や、よし

大き石に冷たき薄陽よく見れば虫這ひ居りぬ命小  
さき

こがらしを窓にきゝつゝ、一人居の埋火ぬくし明る  
きローソク

石の如など働くべき鳴(り)止(ま)ぬ砦の風に  
身はさらしつゝ、

みをすほめせきたてられる如くして風鳴り遠く続  
くをきけり

右の六首は「北支派遣 菊池源武」とあって題名は  
ない。時期的には(2)と符合する。文通を通じて作  
品を送るようになり、『ことたま』掲載に至ったので  
ある。(2)に病気の全快をよろこぶ箇所が見えるので、  
再び前線に出ることになった頃の作品であろう。しか

し、実戦現場のリアルな作ではなく、ここでは宿舍で  
の兵士の日常生活が哀愍をもって歌われている。折り  
たたんだ軍袴を枕にして眠る習慣、快方に向かつてい  
る若い兵士、ローソクの明かりに味わう束の間の安息。  
しかし、薄陽の当たる石を這う虫の命へそそぐまなざ  
しがあり、きびしい風に身をさらしながら「など働く  
べき」と、戦うことへの懐疑的な内面も歌われており、  
作品の深まりを知ることが出来る。白蓮が注目したの  
はこの作者の持つ抒情的、内省的な面だったのでな  
いだろうか。

ここに『灯かげ』(ほおづき書籍株式会社・一九九九・  
二私家版)と題する四十頁ほどの冊子がある。出版後  
およそ十八年経つが朱色の表紙が鮮やかだ。編者は復  
員後の菊池源武(一九一四・二―二〇〇九・十)。あ  
とがきの「まとめに」では白蓮の他界を知ったのを機  
に編んだとある。『塹壕の砂文字』の作品募集に応募  
したこと、突然白蓮から手紙が届いて驚いたこと、「こ  
とたま」の会員となり、添削を受けたことなどが綴ら  
れている。冊子の内容は、飯塚の伊藤家出奔の新聞記  
事、死亡記事などの写真とおおよその履歴に始まり、



白蓮の手紙六通の写真とその読みの活字化したもの、また、便箋にびっしりと記された現地での歌の草稿写真とその活字化したもの、現地から白蓮に宛てた『塹壕の砂文字』への礼状（昭和一三年十月）と続く。どの頁を開いても実直な人柄のしるはれる誌面である。実は先に示した四通はこの内に含まれていたのであった。ただ筆者が受け取ったのは実物の便箋と封筒による画像であり、また封筒の方は裏面の画像がなかったため、正確な年月日を知ることが出来なかった。非常に残念である。

しかしながら、いずれにしろ白蓮との歌を通じた交流はそのまま（魂と魂との親交）の具体的な形であったのであり、ここにこそ他ならぬ『塹壕の砂文字』編纂の本来の意図があったに違いない。まして、その体裁から類推されるような編纂・発行自体が戦争協力的な目的でなされたとは考え難い。あくまでもそれは戦時体制に反しない形であったと思われる。

## 五

柳原白蓮（燐子）についての波乱に満ちた経歴はこ

こでは省略するが、白蓮に関するさまざまな評伝および文章など先行する大方は前半生で終わっている。前半生とは、初婚に破れた後二五歳年上の福岡の炭鉱王・伊藤傳右衛門と再婚したものの、複雑な家族関係や因襲の根強く残る生活環境に耐えがたく、ついに婚家を出奔して年下の恋人宮崎龍介と新生活を始めるまでを指す。しかしそれ以降の活動、軌跡については語られることなく過ぎてきた。本歌集の刊行を含めて白蓮の後半生、特に昭和の活動に早く注目したは菅聡子であった。一九四三年刊行（奥川書房）の小説『民族のともしび』の解説によると、この小説には社会主義運動家である龍介の影響が見られること、華族として生まれた白蓮が龍介とその運動に賛同して集まった若者たちの中で、理論ではなく実感的にその思想を学んでいたこと、また同時期から昭和初期にかけて発表された文章には、特に自分の子どもたちを題材とした慈愛に満ちた内容が多く、実感的にも概念的にも（母性）が重要な位置を占めていること、などを指摘する。その上で、『民族のともしび』が三人の母を軸とした（軍国の母）の物語であり、他方その母に育てられ中国人

の血をひく二人の青年崇、順、そして順と双生児の關係にある達を軸とした物語であるとし、この物語が最終的に〈大東亜共栄圏〉に回収され、「二心なき陛下の股肱の臣」として死ぬという国策的小説であると明言する。同時に女性表現者としての白蓮にとつては〈母性〉がどのように戦争に参与するの<sup>注1</sup>か、その機先の一端を語るもの、と論述するのである。

さらに『塹壕の砂文字』との共通点は、白蓮が「あとがき」に記す「東洋平和、亜細亜民族の福利」であり、色濃く表れるセンチメンタリズム、つまり皇軍の兵士たちの奮闘に対する感謝、前線で戦う兵士や病院船に乗る看護師（婦）が船酔いに苦しみつづつ傷病兵の看護にあたる中から届けられた出版費に涙をこぼすなど、こうした涙と感傷に満ちた言葉が女性たちを戦争協力へと駆り立てた心的機制としながら、『民族の<sup>注2</sup>もしび』との結節点が〈母〉にあったと述べる。

この〈センチメンタル〉〈女性〉〈母および母性〉という要素の内、〈センチメンタル〉と〈女性〉とは繋がりやすいかもしれない。『塹壕の砂文字』からも読み取ることができるだろう。菊池源武との手紙にも明

らかに認められる。しかし、それが〈母および母性〉を直接読み取る確証としてはいかがであろうか。また、確かに本歌集の編纂・発行は戦時歌集として、当時の国策に従ったかにみえる。これについてはすでに述べてきた。むしろそれは先に触れた、長男香織の学徒出陣に際しての歌に、その抱える矛盾―母親としての偽りのない心情と時世への配慮―の中でとらえられるかもしれない。昔によれば、この〈母性〉の表象によって戦時下の女性の統合を可能にしたのはその〈母なるもの〉が含意する感傷性であったと言い、それを内面化させたのは短歌や詩小説などの文学的感傷の言葉であったと言う。それが戦時体制に回収されたのだと。また、香織の戦死の後、活動を始める平和運動に対して、「平和」の象徴としての「女性の姿」「母の愛」が戦時下の「軍国の母」、戦後の「靖国の母」の再生であると結論づけている。<sup>注3</sup>

このように昭和の白蓮の作品、活動が一貫して〈母性〉のもとに論じられており、『塹壕の砂文字』もこの中に含まれるとする。

一方、『塹壕の砂文字』の献本者から、日中戦争下

積極的に戦争協力していた生長の家と白蓮とが親密な関係にあったこと、メディアに発表した戦争協力的な作品の存在などを導き出し、こうした点に目を向けることなく、戦後の平和運動に身を投じた白蓮を賛美することに對して、厳しく批判したのが内野光子であった。<sup>注14</sup>要するに、白蓮一人ではない当時の戦争協力的国策的作品をどのようにとらえるかであろう。しかし先述したように、そうではない作品も確かに存在したのであり、共に歌人の営為としてまこととらえる必要があるのではないかと思う。

これに関して井上洋子の、『塹壕の砂文字』には国粹主義的な歌だけでなく、戦争に苦悩する一般市民の歌も収録されていること、『民族のともしび』にも中国蔑視や軍国賛美の表現と共に、中国への同情的姿勢や友愛の精神、それに伴う苦悩が表現されていることを指摘し、こうした作品内にみる思想の両極性にも白蓮の抱えた苦悩や矛盾を読み取ることが出来る、と述べる論考に注目したい。<sup>注15</sup>いずれも今後の課題とすべき示唆と刺激を受けた論考であるがここでは紹介するに止めておく。

本稿ではその編纂意図である〈魂と魂との親交〉において、その具現化したものの一つとして菊池源武との手紙の往還を述べた。その往還の要をなしたのはとりも直さず〈歌の力〉であったのである。戦後の平和運動の実践は、自ら巡礼と呼ぶひたむきな講演旅行であり、歌の旅でもあった。それは香織を含む戦死者への鎮魂、生者と死者との〈魂と魂との親交〉というかたちで再生されていったと考えたい。なお、〈魂と魂との親交〉の発想については他方面より掘り下げる必要があるだろう。今後の課題としたい。

## 〔注〕

(1) 柳原白蓮第五歌集(一九五六・六 ことたま社)

拙稿「柳原白蓮における歌の変容と到達」『目白大学人文学研究8』二〇一二・二及び歌誌『相聞』第六三〜六五号 相聞の会 二〇一七・四〜同十一

(2) 一九五〇年 九州支部発足

(3) 一九四六年 世界平和を実現しようとする非政治運動として発足。アインシュタイン、湯川秀樹など世界的文化人や科学者が賛同した。日本では四八年<sup>16</sup>「世

界的文化人や科学者が賛同した。日本では四八年<sup>16</sup>「世

- 界連邦同盟」が結成され、尾崎行雄、賀川豊彦らのもとで活動がはじまる。
- (4) 菊池直人「人間愛への捨身行―宮崎龍介の生涯」『日本及日本人』一九九一・一 宮崎蕨夢・宮嶋玲子聞き書き『白蓮 娘が語る母燐子』旧伊藤傳右衛門邸の保存を願う会 二〇〇七・五
- なお、『季刊とつてん』第五号（一九八〇・十一 滔天会）に龍介の手記「蒋介石への使者 憲兵隊監禁一週間記」がある。
- (5) 高橋隆治『戦争詩歌事典』日本図書センター 一九八七
- (6) 柳原白蓮・自伝的小説『荆棘の実』新潮社 一九二八・七 再婚前、実家に入りする法華経の行者によって人間の靈魂への関心を持ち、日蓮宗を信仰する。同宗は法華経を拠り所とする。
- (7) 深尾須磨子「白蓮と邦子」『俳句』角川書店 一九六七・五
- (8) 朝日新聞筑豊版（二〇〇八・十一・十九）宮嶋玲子氏提供
- (9) 古川隆久『昭和史』ちくま新書二一八四 二〇一六・五
- (10) 『短歌研究』特集「聖戦の詔勅を拝して」一九四二・一 菅聡子「柳原白蓮の〈昭和〉」ですでに指摘されている。注(12)
- (11) 菅聡子「民族のともしび」解説文 岩淵宏子・長谷川啓監修『帝国』戦争と文学』ゆまに書房 二〇〇五・六
- (12) 菅聡子「柳原白蓮の〈昭和〉」『お茶の水女子大学人文科学研究』第五卷 二〇〇九・三
- (13) 注(12)に同じ
- (14) 内野光子「白蓮年譜の空白―『塹壕の砂文字』献呈先から探る」『日本古書通信』二〇一六・四
- (15) 井上洋子「柳原白蓮の戦後―銃後の母から世界連邦運動へ―」東京芸術劇場×立教大学主催連携講座「池袋学」二〇一四年度冬講座 二〇一四・十二
- ※引用作品は漢字のみ新漢字に改めた。
- 付記 菊池源武編『灯かげ』は故編者の長男である菊池幸彦・智子ご夫妻の好意により譲り受けました。あらためてお礼申し上げます。